希臘のレキートスの繪に就いて（一）

上野直昭

序

希臘文明が遺した産物の中、多様な形式を有する陶器は種々の點から世の注意を惹いて居る。その形を様々にし其各々に異つた名を與へた豐富な空想は別としても、其處に描かれた幾多の繪畫は、希臘人の日常生活と其信仰とを現はし、又一方には希臘に於ける繪畫の發達の程度を推測せしむるものである。（希臘の陶器の形式に就いては嘗て本誌拾貳卷六號に南薫造氏が說き、これ等に描かれた繪に就いては白樺第二卷第二號に本誌の兒島が書いた事がある）、殊に今自分が此處に述べんとする白地レキトスの繪は題目の種類こそ少ないが特殊の意義を持つて居る。自分は未だ白地のレキトスの實物を見た事が無いから何等直接の研究を述べる事は出來ないが、幸此頃 Weissgrundige Attische Lekythen nach Furtwänglers Auswahl bearbeitet von Walter Riezler, 1914 München を見る機會を得たので、これの美しい寫眞を複製し主としてこれによつて其一般の性質を述べて見たいと思ふ。

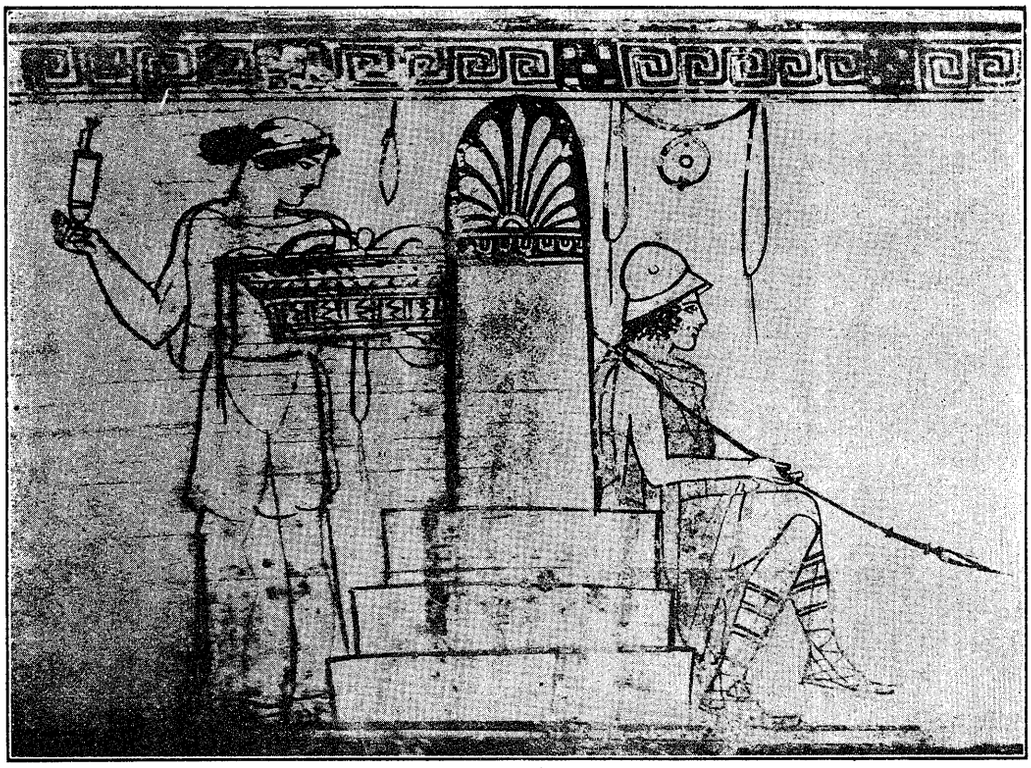
第一圖

レキトスの形が何時始まつたかは確でない。狹義の所謂レキトスの類型が未だ定まらず、固有の技巧が充分に發達せず形も確定せず、其圖柄も特殊のもので無かつた時代がある。併しこれ等はやがて定まり、全く他と獨立した別個のものとなつた。

希臘の陶器の用途は何れも明瞭でない。只レキトスのみは製作の目的が明かで繪は工藝家の單純な思想に出で、技巧も全く他の陶器と異つて、新しい表現法、新樣式を生じたのである。

アリストファネスの詩の中にレキトスに關して句が二つある。文化史上の研究によればレキトスは此頃に出來たものとしなければならないから、此二句は重要な價値を持つて居る。一は「死者の爲めにレキトスに繪をかく

第二圖



第三圖

畫家を叙し、他は老婆に惱まされた若者が絶望して老婆を呪ふ場、死を意味する中にレキトスの事を述べて居る。此處に述べられたレキトスが今吾人の說かんとして居るレキトスと同一である事はレキトスにある圖からも推定する事が出來る。

但し此圖柄は今說く部類のものに限らない。黑繪式の陶器畫に屢々ある。又白地のレキトスと同時に赤繪式のものも多く出來た。確なのはこれ等の形のものは油を容れた事である。細長い頸は一滴宛灌ぐのに便利であり、狹義のレキトスの目的もこれに合するものであつて、アテン人は香りのいゝ油やバルサムをレキトスに容れて來て、死人に灌いたものらしい。

レキトスが專ら死者の爲めに作られた事はアリストフアネスの詩句でも明であるし、死者と共に墓所に持つて行かれた事も發掘物から推定し得る。斷片となつて保存されたものゝ中には破壞された後火中した痕跡がある。これは赤繪の壺によくあるのであるが、屍體を燒く際に共に火中したと見る外はない。最後の油を灌ぐと共にこれを破碎して、存命者の使用に堪へざるを示し、斯くて火中したのであらう。屍體を燒かずして埋葬した處ではレキトスを空しくして死者の側に置いた。

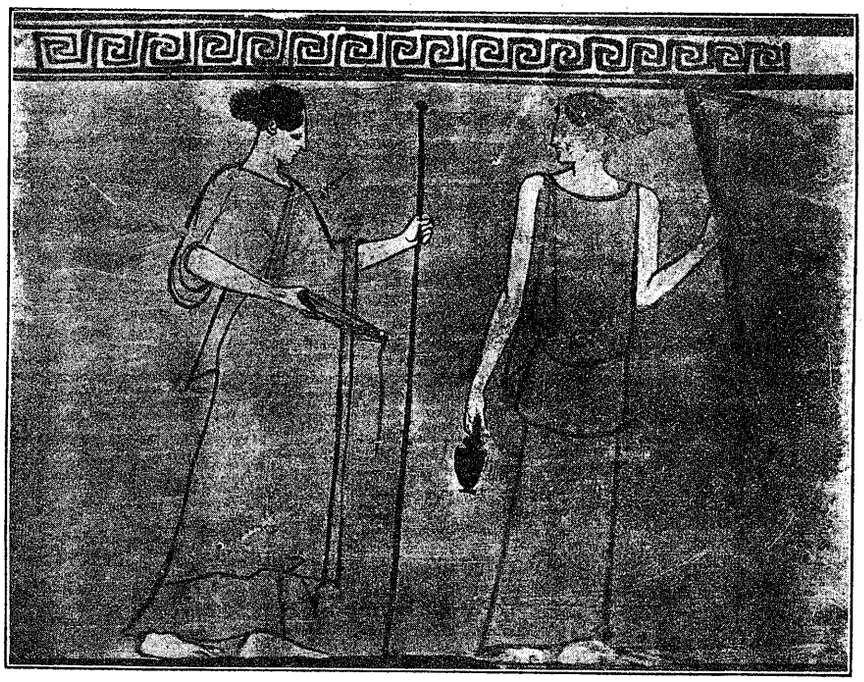
死者の所持した品の如く、レキトスも其墓の傍に立てた、墓碑の段上に立てた繪は多い。(アートタイプ參照)家族が墓參に持つて來る繪がある。(第三圖)是は記念日に墓に油を塗り、又は死者に灌いたことを示して居る。唯墓の裝飾としてレキトスの大切だつた事は大理石で作つたり、又非常に大きなのを作つて居るのでもわかる。これは何れも實用とはならず、單に象徵としての用をしたに過ぎない。ある墓には多數のレキトスが立つて

居るのもある。相稱的に立つて居るものは建築的裝飾の意味で墓と同時に出來たのであらうし、不規則的に自由に立つて居るのは墓中に葬られた家族の一人に一個といふわけであらう。此レキトスが一つの墓に多く立つ例は次號に掲げる。形の大きくなつたものには大理石のレキトスを獨立の墓碑としたのもある。これには立派な浮彫のついてゐることがよくある。レキトスの繪にレキトスを墓碑として描いたものは今迄一つ發見されて居る相であるが其寫眞は載せてないから複製する事は出來ない。ルトロフォルスを墓碑とした圖のあるレキトスが載せてあるから第五圖に出した。低い臺の上にルトロフォルスを載せ、籠を持つ女が傍に立つて居る圖である。或は又細長い墓碑に大きな飾の多いレキトス一つ丈を浮彫として附ける事もある。

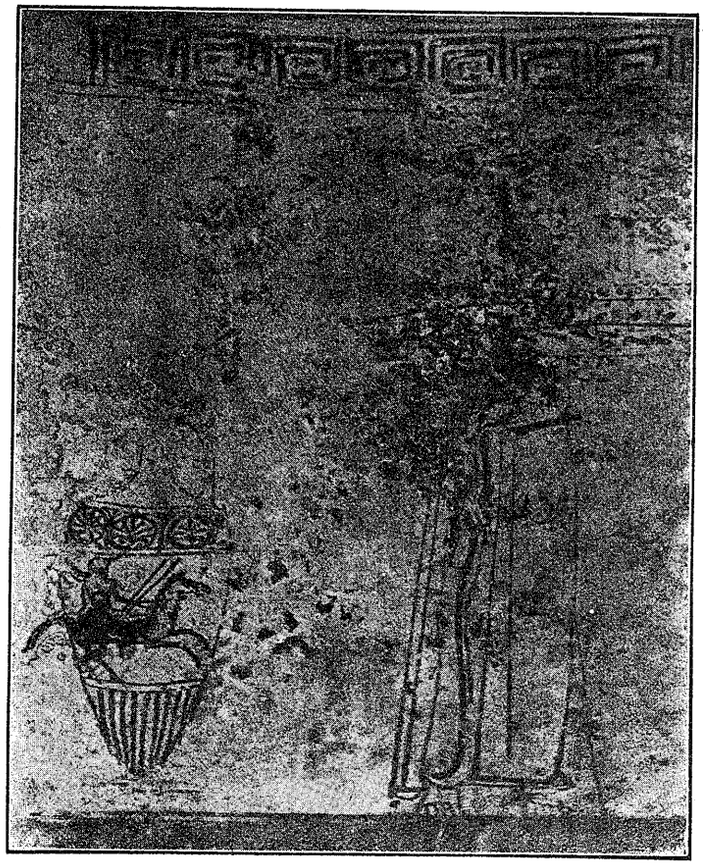
黑繪、赤繪の壺は用途は別としても、大部分は輸出向きであつた。輸出先きは伊太利の諸處で、ある工場の作品はある處と殆んど一定して居る位であつた。レキトスはこれと異つて全然內地用であつた。レキトスの大多數はアッティカと其隣のエレトリアで發見された。外國には稀れで、あつても輸出を思はせる樣に纏まつては居ない。從つて外國人への輸出ではなく、死者を祀るにレキトスを用ふるのはアッティカの風俗であつて、外國で死んだアテン人をアッティカ風に祀る爲に時々持つて行つた位に過ぎないのであらう。

描寫の對象

レキトスの繪は死と、これに連關した圖に限る。一見して然らずと見へるものでも、よく研究すると同じ題目に屬する事が明かとなる。只例外は古い、他の壺との分化が充分で無かつた時代のものにある。例へば第六圖のアマゾンの如きは死者との關係は無く、壁畫などから寫したものかとも思はれる。第七圖は樣式上にも技巧上にも前者と類似して居るが、これも死と直



第四圖



第五圖

るのがある。これを靈の鳥と解した人もあつたが併しこれは家畜で死者に伴つて墓又は下界に往くものと見たらよからう。

葬送の行列は大きな幾何學的樣式の陶器や黑繪の壺にはあるが、レキトスの繪の樣な一ト目に見るべきものには適しないから出て來ない。併し埋葬の象徵的（神話的といふてもよいが）描寫は殆んどレキトスに限つて居る。睡眠と死とが各羽ある魔形として屍體を墓に置く圖である。ロンドンにあるレキトスは其一例である（第九圖）。

此二つの魔形は一は美しい若者とし、他は髯ある男として描出されて居る。併しこれは他の陶器の繪から推定し得るので、レキトスには名を添へたものは無い。

死と睡眠とを兄弟と見る事は、他の圖に現はれた死に對する觀念と一致しない。埋葬準備も、死者を歎くのも、墓所の祀りも日常の經驗である。Charonの渡船は、死の世界の入口で行はれると人々の信じてゐたことを描いたものである。睡眠と死との圖は、各人の身自ら體驗した埋葬を空想界に引入れたものである。從つてこれは象徵的と見なければならぬ。寧ろ古い詩的の空想が作り上げた圖が殘つたものと見るのも面白い考である。

當時の民衆の信仰を明瞭に示すものは Charon 關係の圖である。Acheron の岸に死者を待つ渡守 Charon を描ける圖は活き接の關係は無い。神の使イリスが飛んでゐる圖である。更らに第八圖の如く、只神を祭る圖もある。これ等は何れもレキトスに限らず、他の陶器にも現はれる題目である。

埋葬準備と埋葬

下界へ下る事

埋葬準備の圖はよくあるのだ相であるが、リーツラーは擧げて居ない。其記述によると、死者は臥床の上に横はり、全體衣服に包まれ、幅廣い紐で結ばれ、其紐は臥床から下へ垂れて居る。レキトスは下に又は臥床の上に立つ。家族が悲し相に屍體を取りかこむ。死者の精靈（アイドロン）が空を浮遊する。臥床の下に鳥の居

た民衆の信仰を直接に示すものである。

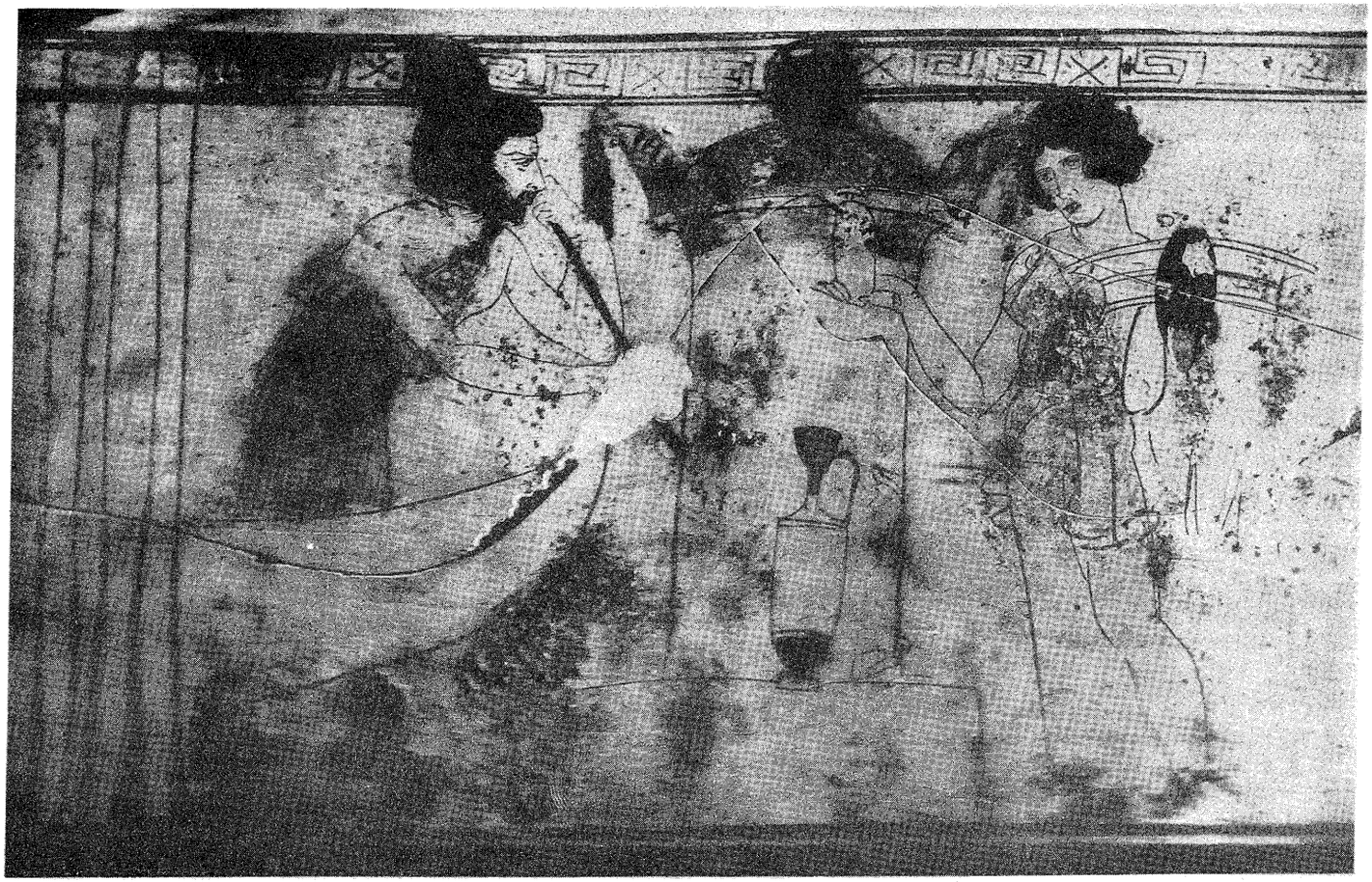
三色版に出した圖に於て Charon が小舟に乘つて居る。粗野な野蠻な顏つきで、少しも希臘人には似てゐない。Acheronの岸邊に舟を寄せて掉で小舟を支へて死者を待つ。死者はヱールを被り、躊躇する。奈落へ赴く死者の附添 Hermes Psychopompos は手を延べて彼女を招ぎ、Charon に渡さんとする。風景は無い。併し其場所を示すものは多くのアイドラである。Charon の周圍に飛ぶ精靈である。これは Charon と共に來たものらしく、好んで影の國の境を飛びまはるものである。殊に最も先きへ進んだ二個の手つきが泣訴狀なのからも斯く見てよろしい。死者ある場所にのみ此アイドラは飛び、埋葬された屍の臥床の周圍、墓地などに居る。此小さい、飛行物は當時の希臘人が地下界に生きて居る死者について持つた思想に適合するものである。

Charon の型は種々に變遷した。悲しい顏のもあれば、怪しげなのもある。漸々美しくなつて特質を示さないものも出て來た。圖に出したのでは第十圖は悲しげな顏をした例で第十一圖は普通の船頭然として特質の少ない例である。立派な繪畫と發達したものには此種の最も堂々たるものがある。アートタイプにして出した圖では Charon は陰鬱な魔物となつて現はれて居る。景色を添へて場所を示すのがある。例へば蘆を小舟の周圍に生ぜしめて河岸を想はせ、土坡の線を加へて漠然と陸地を示唆したのもある。

Hermes を缺く事もある。Cheron と死者とが靜かに向ひあふ事も多く、又死者が心配して躊躇し Charon が慰めて居る樣なのもある。時には死者に生存者が伴つて來る。Acheron の岸邊に子を伴うた母は鳥と小箱入りの玩具とを携へ來り、(第十一圖) 貴婦人に侍する女は墓に供へられた供物を運ぶ。

これ等の描寫は、事物を識得するに、已に幾分の自由と不明

第六圖



2　ンロ一カ

第七圖

相結合して、感じを最も強く表現すべき繪を作り出したものと見たらよからう。供物ある墓、籠を持つて悲む婢及び Charon 等はアテン人のよく知るものであつて、これ等が集つて統一的の情調を誘ひ起す。何れも死の響である。相混じて一時に聽けば其響は更らに深い。實際との關係は問題にならないのである。

以下重な挿畫について説明をつける。

第二圖

肩。白地、地は硬く、光澤あり。ニスの光澤は強く。一筆で不等に塗られ、一部は薄めて渦色を呈して居る（ヒトンの皺）。無色。上のメアンダーの形は離れ〳〵になつて居る。圖の下にもメアンダーがある。

肩には唐草と、右方に飛ぶエロスの繪がある（扉繪、第一圖は全形）。

主圖。婦人の室へ男の訪問する。ヒトンを着た女が椅子に掛けて居る。膝から腰へかけて布を纏ふ。手に輪を持つ。膝には鳥がとまつて居る。女は耳輪、腕輪をつけ、頭髪に布にて結ぶ。靴をはき、外套を着た男が前に立ち、左脇に節ある杖で身を支へて居る。女の後にあるのは仕事用の籠である。三行の文字の中央の外は右から左へと讀む。

此圖は此處に出す中では、樣式上最も古いものである。壺の形から見ても、目を正面向きとしたのも此證據となる。正面向きの目は白地のレキトスには多くない。形の太いのも古いからである。レキトスは太く短いのから細く長い方に變遷した。

瞭とが存して居る證據を與へる。母や侍女の形は生きた人を寫したものであるから、圖は民衆の信仰上、死者に起る過程とのみは見られない。實際墓で起つた事件、即ち家族が死者の大切にしたもの、又は死後の生活に必要なものを墓に持つて來るのを、空想した過程に移し入れたのである。斯くて Charon の渡船は埋葬に對する詩的象徴となるのである。

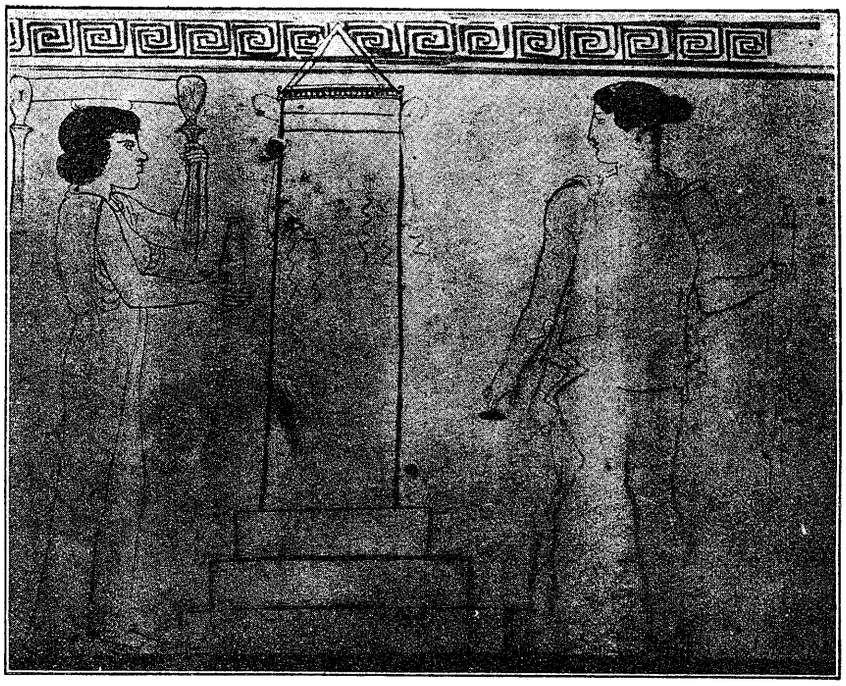
此處にこれ等の描寫の特性がある。コロタイプ版の圖に於て中央に墓碑があり、基礎石上には大きなレキトスがある。右方には侍女とも思はれる少女が、墓中に息める死者に供物を持つて來る。然るに左方には Charon が小舟で到着して自分の伴れて行くべき死者を待つが如く、靜かに棹で身體を支へて居る。恰も Acheron の岸が墓のすぐ傍にある樣である。墓地には蘆すら生じて居る。併し此圖にあらはれた事物の關係を細かに見ては誤である。又細かく見て實際との錯誤の爲めに非難するのは藝術家を正しく解する所以でない。これ等の單純な畫家の心中に吾人を投ずる事、又これ等の繪を見るべき當時の人の心に立入る事は容易ではないが、素朴な思想と驚嘆すべき具象性とが

三　圖

肩、白地。墓塲、中央に墓碑、三段の高き礎石を重ねたる上に長方形の石碑立つ。上方はキマと高い棕梠が載せてある（兩方共に書いたものと見てよろしい）。左方には正面向きの女、頭は右の方に向けながら足は左へ向く。右手レキトス（線がき）を携へ、左に紐を入れた籠を持つて居る。右方、正横向きの若い男が墓石に腰を掛けて居る。右足は左足の上へ組みあはせ、右手には鎗を斜に握つて居る。空處には紐が二重に掛り、其中間に盃（？）が掛かる。左方には小さな袋がある。

色及技巧。女の衣、男の衣、墓の紐には朱の痕跡がある。其他は皆假漆、濃淡を種々に用ゐ、線は太い。地は擦つた傷が甚だしい。原始的な作風であるが、印象は強い。

此男が悲しむ人か、自身死者であるかは問題であるが、靜かに前方を眺め入つてる處を見れば死人であらう。空處に掛かつて居る紐や、道具類は墓の描寫に屢々出づるのであるが、これは此繪畫が全然素朴的象徴的の性質を有して居る證據とするか、又は畫家の思慮のない徴證と見る事も出來る。畫家は家内の描寫に普通であつたものを、平氣で墓の描寫に移し用ゐて、空處をふさいだのである。此圖に於ても紐が下がつて居る爲めに構圖の平均がよくとれて居る。或は又畫家は墓塲の周壁に供物の掛かつて居る處を考へたかも知れない。



第八圖

第四圖

デメーテルとコーレ（？）

右方正面向きのコーレ、右手カンネを下に持ち、左手を半ばあげて燃ゆる松明を持つ。左方デメーテル、横向き。右手に盃を持ち、中から酒がこぼれる。左手に錫杖をつく。

地には光澤はないが、かなり硬い。女の肉身は白く、デメーテルの髮紐、錫杖の斜線カンネの口は暗赤。デメーテルの外套には朱の痕跡がある。線は假漆。

酒を灌ぐ儀式の繪は陶器によくある光景である。

第六圖

肩、土の地。パルメットは假漆。アマゾンが馬上にサルピンクス

を吹きながら左手には鎗を持つ。色彩は豐富に用ゐてある。馬とアマゾンの肉身とは白く置いてある。肩の衣は朱。上身は前後共に青(鎧か)。上腿のヒトンは褐赤色、邊緣は朱、脚は青下は赤、裸足である。腕には黑いギザ〳〵の痕跡がある、(假漆ではない)。線描きは假漆で、一部は淡めてある。サルピンクスと鎗とは黑い假漆である。

此繪は白地のレキトスには珍らしい。赤繪のレキトスにはアマゾンの畫はよくある。此繪が墓塲と關係のない事は確である。此事は本文にも述べてある。

第八圖

墓塲。中央に墓碑、紐で飾つてある。右方正面向きの女。頭を左方に向け、半ば揚げた左手にレキトスと紐とを持つて居る。髪は束ねて居る。左方横向の待女、野蠻な顔つき——をして居る。頭上には運搬臺に椅子をのせて居る。右手はアラバストロンと紐とを持つ。

技巧及び色、地は非常に堅く、龜裂全面にある。然し光澤はない。假漆は光澤が强く、薄めて褐色となつて居る。色は殆んど全く消失した。運搬臺と墓にある紐には朱の痕跡、紐の末端は鈍い黑色である。運んで來る椅子は矢張り供物である。此上に死者は腰を掛けるのである。

第九圖

第十圖

肩、白地。

Hermes 少女を Charon の處へ導く。左方より Charon は其小舟に乘つて來る。舟の前方には目がある。Charon は野蠻な顔をして居る。處に毛皮の帽子、エクソーミスを着、右肩は肉體を出す。膝を屈して舟中に立ち、棹を突き立てゝ居る。中央には正面向きの Hermes 長靴、ヒュラーミス及び羽のついた高い帽子、髯がある。右手を下げてケリカイオンを持つ(ケリカイオンの形は色刷によく出て居る)。右方に立つ少女の方へ頭を向けて其上腕をつかむで居る。少女は半袖のヒトン、上に外套を着け、頭髪は後部に結んで居る。

技巧及色。地は非常に堅く、全部に龜裂がある。火中したに違ひない。假漆は黃褐色に淡められ、地が脆い爲めに假漆の線の一部が消へて茫つとした處がある。エクソーミスと棹とは濃い褐色。其他の色は殆んど消へ失せた。女の外套と Hermes の衣とに僅かに赤の痕跡がある。

第十一圖

Charon 兒童を迎ふる圖。左方線で示した舟中に Charon 立つ。右肩を出してエクソーミスを着、毛皮の帽子を被る。右手を少しく上げ挨拶する形をとる。中央に丘の小高い處を示した線が圖の頂上に及び、其處の布切の上に兒童が右方を向き、不

第十圖

安な顔でCharonを見て居る。下には提紐のついた小箱がある。兒童の玩具でも入つてあるのであらう。右方から女が來るヒトンを着け、肩から外套をかけ、頭髪は後部に束ね、左手には鴨の樣な鳥を持つ。鳥は兒童の玩びであらうし、女の顔には悲哀が著しくあらはれて居る。

地には龜裂がある。線描きは薄赤い。エクソーミスは暗赤色。帽の毛皮は灰黑(輪廓は赤)。兒童の入れる布切と女の衣の廣い緣は黃色である。

Charon の類型は此圖では野蠻でもなく魔物でもない。又全く無開心でもない。

表紙繪

題、別離。右方若い男(靴、ヒユラーミス、頸部にペタストス、帽子、頭髪短かし)。正面向き、(左足は横向き、古い型に從つたのではなく、出發の瞬時を寫す爲めであらう)。左手に二本の鎗を持つ。右手盃を持ちて延ばし、左方に立つ婦人はこれに酌して居る。女は半袖のヒトンを着、頭髪は後部に結び、注意深く頭を僅かに下げて居る。左手は力をこめて少しく高めて居る。女の後には倚子がある。

技巧及び色。線描きは假漆、一部は淡めてある。朱、ヒユラーミスと頭。

原色版

Hermes 一婦人を Charon の處に導く。左方に線描きの舟中の Charon はエクソーミス、毛皮の帽子、醜き皺ある顔(第十圖と同型)。膝を屈し、棹で身を支へて居る。中央に Hermes 立つ。鍔廣の帽子、ヒユラーミスを着く。正面を向き(右足は横向き)、右手にケリカイオンを持ち、右方婦人を見て左手にてつかまへんとして居る。婦人は横向き、長きヒトンを着、頭から外套を被り、右手にて肩の邊をつかむ。Charon の周圍には八個の精靈が飛ぶ。最も右方の二個は悲しみを訴へる樣に一方の

第十一圖

手で頭を抑へて居る。

技巧及び色。地は龜裂が多い。線描きは淡赤、Hermes 及び婦人の頭髪、Hermes のヒュラーミス(襞は灰色ならん)及び棹の一部(他は淡赤)は同じ赤の濃いもの。精靈、ケリカイオン、婦人の外套(濃墨、襞は赤色)は黒灰色。ヒトンの色は消失したが、足部にある輪廓で外套より長いヒトンのあつた事がわかる精靈の事は本文に述べた。

アートタイプ版

Charon と婢。中央に、高い、簡單な礎石上に廣い、紐で飾つた墓碑があり、上にはギーベルを戴く。礎石上に大きなレキトスが見へる。右方には女が三分の二正面を向いて居る。右手にアラバストロン、左手に紐を入れた籠を持つ。髪毛は多く、浪を打つて居る。其顔には悲哀があらはれて居る。左手には Charon が小舟の中に立ち、舟の後部は高い蘆の中にかくれて居る。Charon は前にかゝんで、棹に身を支へ、エクワーミスを着、高い帽を被り、陰鬱な顔に、短かい、手入れのしてない髯が生へて居る。Charon は女を見て居る。女は Charon を知らない。

色及び技巧、殆んど全體の線描が、光ある暗赤色である。Charon の帽、レキトスの黒い部分、二三の紐等は灰黒色。小舟の下には青綠の痕跡がある(水の意か)。女の衣には緣の痕跡がある。

(未　完)